

IV 終章

長所と問題点に対する総合評価

今回の自己点検・評価では、大学及び大学院の主要点検・評価項目のそれぞれにおいて、到達目標、現状の説明、点検・評価、改善方策の4つの視点からの具体的な記述が求められた。現状の説明と点検・評価に関してはともかく、到達目標と改善方策の記述に際しては、委員会の中でしばしば議論がなされた。それは、各委員の間に大きな意見の相違があったからではなく、本学の今後の歩んでいくべき方向を議論せざるを得なかったためである。時代の流れは早く、大学を取り巻く環境も加速度的に変化しつつある中で、大学の管理運営はますます困難になりつつある。このような状況の中で、現在各大学は、大学の現状をできる限り正しく把握し、問題点を確認し、改善への手立てをすばやく立てることと同時に、大学の個性と長所をはっきりさせ、発展させることを求められている。しかし、この両者を両立させるためには、よほどしっかりとした大学としての中・長期的展望がなければならないと思われる。今回の自己点検・評価がそのような展望への足がかりになればと切に願っている。

最後に、長所と問題点に対する主要点を以下に纏めておく。

II 大学・学部における主要点検・評価項目

1 大学・学部等の理念・目的及び学部等の使命・目的・教育目標

高度な知識・技能と医療人としてのしっかりとした使命感・態度を持つ医療人養成機関に相応しい、理念と教育目標を掲げ、着実に実践に移していることは高く評価できると思われる。今後はこれらの理念・目標を学内外において周知徹底することが重要である。

2 教育研究組織

本学では早くから薬剤師の生涯研修の重要性を認識し、さまざまなプログラムに取り組んできた。これが高く評価され、2007（平成19）年6月20日に、「有限責任中間法人薬剤師認定制度認証機構」（第三者評価機関）から生涯研修認定制度の実施団体としての認証を受けた。本事業を更に強化するため、本学同窓会との緊密な連携のもと、学内に学長直属のエクステンションセンターを創設した。このように薬剤師の生涯研修事業を学部、大学院と並ぶ第3の教育事業として推進していることは高く評価できる。一方で、6年制課程における実務実習教育や臨床系教育のより一層の充実に向けて、医療薬学系研究室の強化及び実務家教員の早急な補充が求められている。その他6年制課程における教育・研究に相応しい教育研究組織のあり方を検討するための組織を早期に立ち上げる必要がある。

3 学士課程の教育内容・方法等

薬学教育6年制においては「薬学教育モデル・コアカリキュラム」、「実務実習モデル・コアカリ

キュラム」、「卒業教育カリキュラム」等の指針が設定されており、本学もそのカリキュラムに基づいてカリキュラムを構築している。従って、本学に固有の教育内容を編成するのは容易ではないが、「医療人としての使命感と倫理観を十分に理解し、高度な薬学の知識を身につけた薬剤師並びに教育・研究者の育成」をできる限り実現することを目指し、高・大接続科目、薬学導入教育、1、2年次における教養選択科目、6年間を通じての少人数演習授業の設定等の工夫を行っていることは評価できる。ただ、以前より学生による授業評価アンケートを実施したり、自己点検・評価委員会などが存在するにもかかわらず、FD活動が効果的に行われてきたとは言えない点もある。今後FD実施委員会（仮称）を新規に立ち上げ、自己点検・評価委員会と共同で、この点を克服するよう努力しなければならない。

4 学生の受入れ

現在、入学者選抜方法、入学者受入れ方針、入学者選抜仕組み等に大きな問題点はないが、定員管理といわゆるミスマッチ問題は、早急に対処しなければならない問題点である。定員管理に関しては、技術的に難しい点もあるが、受験生情報のより綿密な情報の収集・分析を行えるような体制を構築し、できる限り入学者数と定員数を一致させるよう努力する必要がある。また、ミスマッチ問題では、高・大連携や入試広報、オープンキャンパス等の方法を駆使して、できる限り入学以前の段階で減らすよう努める。

5 教員組織

6年制課程の教育における専任教員の数が、大学設置基準を満たしうる状態にあることは、評価できる。今後、薬学教育のあり方を見極めながら、また医療薬学系の教員や実務家教員を補強しつつ、常に適切な専任教員数を確保する。その際には、現在問題となりつつある各職階における年齢構成上の不釣合いを解消するよう配慮し、適切な昇任人事を積極的に行う。また、人事選考の際の評価法についても実情に合わせ整備し直すように図る。現在6年制課程において過重になりつつある教員に対する負担軽減のためにも、教育研究支援職員制度の導入やより効果的な教育研究ができる体制へと教員組織を再構築することも視野に入れる。以上のことを学内において推進するために第3次将来計画委員会を立ち上げることを検討する。

6 研究活動と研究環境

本学の研究成果は、質・量ともに高いレベルにあると評価できる。研究環境も現在比較的恵まれた状態にあると判断される。今後の課題として、研究活動に関しては、多様な共同研究を積極的に推進し、外部研究費の獲得増大を図ること、また、研究環境に関しては、学生指導のために必要される個室の確保と、各研究室が共同で利用できる共用空間の確保である。

7 施設・設備等

歴史と伝統のある大学なので、施設は全般的に古くなりつつある。随時更新は行っているが、今後も計画的な手入れが必要である。特に6年制における学生数の増加には早急に対処しなければ

ばならない。現在その過程にある。

従来遅れがちであった教育のための情報処理機器や施設の整備とインフラの整備は、新教育棟（11号館）が竣工されたため大幅に改善される見通しとなった。今後は旧来の施設を順次改善して行く予定である。

その他、更新時期のきている機器の更新を行うことや、現在分散管理運営されている機器の集中化（センター方式）、あるいはバリアフリー対策など、検討しなければならない問題がいくつかある。

8 図書館及び図書・電子媒体等

6年制課程の学生増に合わせ、引き続き図書館の環境整備を行うことと、現在大きな問題となりつつある図書館の蔵書収容能力の問題を何とか解決する方策を検討すること以外に大きな問題はない。

9 社会貢献

社会貢献としては、現在「大学連携ひょうご講座」、公開市民講座、地元の東灘区（神戸市）との地域連携協定に基づく活動を行っているが、今のところ大きな改善点はない。ただ今後のために技術移転や特許取得に積極的に取り組めるようなシステム作りは検討する必要があると思われる。

10 学生生活

現在大学による学生生活全般に対する支援体制は経済面から精神面まで全方位的に行われており、個々にいくつか検討すべき問題はあるものの、全体的には特に問題があるとは思えない。

11 管理運営

管理運営に関しては、すべて規程に則って行われており、厳正・適切に処置されており、特に問題となる点はない。ただ、薬学教育6年制が始まり、現在薬学教育の制度改革が急速に進んでいるため、本学の今後のあり方や中長期的対策を検討するために、第3次将来計画委員会を設置する方針である。

12 財務

財務に関しても今のところ特に大きな問題点はないと判断される。ただ、今後の薬系大学が置かれうる状況を考えると、経常費の再検討や外部資金獲得方法の検討など、より一層の効率運営と財政基盤の強化が求められることはほぼ間違いないであろう。そのためにも上記の管理運営の場合と同様に、中長期的財務見通しの検証及び再検討も兼ねた第3次将来計画委員会を立ち上げる必要がある。

13 事務組織

事務組織に関しては、一部縦割りの弊害や事務業務上の非効率などの問題があるものの、教学組織の一般的な支援体制において概ねうまくいっている状態であると評価できる。今後事務業務のより一層の効率性を求め、また、教学組織の支援体制をより一層強化するために、「学生支援センター（仮称）」の設置を検討する。SDに関しても組織作りを検討する。また将来的には、現在兼務状態になっている法人事務局を独立させ、企画・立案機能を強化させる施策も必要になると考えられるので、これについても第3次将来計画委員会での検討が求められる。

14 自己点検・評価

自己点検・評価委員会の役割を再検討し、より踏み込んだ改革提言が行えるようにする。その上で、全学的な視野に立って、改革・改善のためのアクションプランを立て、あるいは、各部署・各委員会に改革・改善の提言・提案を行い、更にその実行の進捗状況をチェックする体制を早急に整える。また、大学基準協会のプログラムに沿った大学評価を今後も受ける。現在「薬学教育評価機構による薬学教育6年制第三者評価」を受ける準備中である。

15 情報公開・説明責任

事業報告・財産報告・監事の監査報告に関しても、他の情報と同様にホームページ上での公開を検討する。情報公開請求に対応できるように、具体的なルール作りに取り掛かる。自己点検・評価報告書の内容及び大学基準協会の評価結果を大学ホームページに掲載する。

Ⅲ 大学院における主要点検・評価項目

6年制課程における4年制の大学院後期課程（博士課程）の設置条件等がいまだにはっきりしないので、現在のところ学内において具体的な検討作業に入っていないが、6年制も2年が経過し、この問題も具体的検討に入るべき時期にあると判断される。4年制課程の修士課程と博士後期課程については、全体的に問題なく実施されており、特にこれといった大きな問題点はない。ただ、大学院の教育研究に関する活動内容全般が年々複雑になり、多様化する中で今までのような事務組織の支援体制では業務内容全般を十分にこなしきれない状態になっていることは、将来の大学院構想を計画する上でも無視できない問題で、早急な対策を検討する必要がある。

以上

最後になりましたが、自己点検・評価の作成にご協力いただいたすべての教員と事務職員の皆様にお礼申し上げます。また、これまでの自己点検・評価報告書の作成の労に当たられた教員と事務職員の方々に感謝申し上げます。